ガラクタ山の女の子

栗田隆喬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガラクタ山の女の子

【Ｎコード】
Ｎ２７０５Ｆ

【作者名】
栗田隆喬

【あらすじ】
ぼんやりとした薄明かり。いくつもの、ガラクタの山。女の子が一人で、ガラクタの仕分けをしていました。ガラクタの中にあった一つのお人形を手にした時です。「……ねぇ」お人形が語りかけてきました。

ぼんやりとした薄明かりに、いくつもの、ガラクタの山がありました。
「よいしょっ！」
向こうから、女の子の声が聞こえます。
それは、ひときわゴチャゴチャして、汚れて、ひどい有り様のガラクタの山からでした。

女の子はひとりで、ガラクタの仕分けをしているのでした。
額の汗を拭うと、ガラクタばかりの大きな山を見上げます。
あまりの多さに、気が遠くなりそうです。
こういう時、女の子はお気に入りのポーズをとることにしていました。
腰に両手をやり、ちょっと眉間を寄せながら、にやりと笑って、首を振りながら、ふぅ、と、ため息をつくのです。
そうすると、ちょっと恰好をつけている自分がおかしくて、なんだか元気が出てくるのでした。

ガラクタの山には、いろいろなものがありました。
欠けたお人形。
破れた着物。
女の子はそれを一つ一つ、手にとって、布できれいに拭いていきます。
それから、すでに仕分けられた周りの山へと運んで行くのでした。

一つのお人形を手にしたときです。
「……ねぇ」
女の子はちょっとびっくりしました。お人形が口をきいたからで

す。
みると、とてもていねいな作りのお人形でした。
少し欠けていても、真っ白な肌は透き通るように輝いて、きれいです。
長い髪はまっすぐで、乱れがありません。
衣装も細かいところまでしっかりと作られた、それは立派なものでした。
でも、真っ黒なドロドロの汚れが、全部を覆っているのです。
「ここは、どこ？」
「ここはね……」
女の子はちょっと口ごもりました。
「役目を終えたものが、運ばれてくるところなのよ」
ちょうど、ガラガラと荷車の音が遠くから響いてきました。
「ちょっと待っててね」
女の子はお人形を手にしたまま、ガラクタの山を降りました。
そして、足もとの小箱の上に、ちょこん、とお人形を座らせました。

ガラゴロ、荷車の音が近づいてきます。
大きな荷車には、山のようにガラクタが積まれていました。
それを、大きな男の人がゆっくりと引きながら、女の子のところへと向かってきました。

「よろしくお願いします」
「いつも御苦労さま」
男の人は、女の子にうやうやしくお辞儀をすると、荷車のガラクタを、てきぱきとおろしはじめました。
仕分け途中のガラクタの山が、また一回り大きくなりました。
「失礼いたします」
男の人は、また深々とお辞儀をすると、カラカラと、空っぽにな

った荷車をひいて去っていきました。

「……私たち、いらないものなのね」

お人形が口をききました。

「私たち、いらないから、ここに来たのでしょう？」

「そんなことないわ。役目を、終えたの」

「みんな、こんなに黒くて、ドロドロになって、汚くて、いらないから、ここに来たのでしょう？」

女の子は、何か言いたかったのですが、黙ってしまいました。

それは、本当のことだったからです。

遠く、遠く。

ずっと遠くの国から、さっきの男の人のような、たくさんの人たちの手を渡り、ドロドロのついたガラクタが、女の子のところに運ばれていたのです。

お人形も、やはり、そうしたガラクタの一つとしてここへ来たのでした。

女の子はじっと、お人形を見つめました。

お人形も哀しそうな瞳で、女の子を見つめ返します。

その瞳の奥には、何かがありました。

人形には無いはずの、何かがありました。

その動きに合わせて、身にまとった黒いものが、さわめきました。

これほどまでに、このお人形は、人の、強い想いを、記憶を、受けとめていたのです。

「……でもね」

女の子は、膝を折ると、お人形を小箱から立ちあがらせました。

「それは、役目を終えた、ということなの。いらないからじゃ、ないわ」

「役目を終えたのも、いらないことと同じでしょう？」

「ううん、違う」
女の子はお人形を抱きしめました。
「やめて……あなたがよごれてしまうわ」
女の子は首を振ると、黙ってぎゅっと、お人形を抱きしめます。
お人形のまわりについていた黒いものは、女の子に触れると、まるで銀の粉のように輝きはじめたのでした。
「想いも、記憶も、なくてはならないもの。でもいつかは離れていくものなの。だから、役目を終えたら、その人のもとを去るのよ」
お人形の髪を、静かに撫でました。
「その人にとっては、とっても、とっても、必要で、大切なものだったから。だから、去らないといけないの。その人のためにも、ね」
お人形を包んでいた黒いものは、いつのまにか、銀色の波に変わっていました。

ゆっくりと手を離します。
女の子は、お人形に微笑みかけました。
お人形も、ぎこちなく微笑み返します。

女の子はしゃがむと、再び小箱にお人形を座らせました。
「御苦労さま。もう、いいのよ。自由になりなさい」
お人形は、こくん、と小さくうなずきました。
すると、銀の光が大きく、ずっと空の遠くまで広がりはじめました。
「いい子ね。……いってらっしゃい」

小箱の上には、もう何もありません。
あたりは、もう輝きもなく、ぼんやりとした薄明かりに包まれるだけでした。

女の子は膝を払うと立ち上がりました。

それから、仕分けの続きに向かいます。
たくさんの記憶と、たくさんの想いが、女の子を待っていました。

遠くから、また、ガラガラ、荷車の音が聞こえてきます。
女の子は腰に手をやり、眉根を寄せて、お気に入りのポーズをとると、ふぅぅ、と大きくため息をつきました。
それからひとりで、くくっと笑うと、荷車を引いている男の人を迎えに行くのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2705f/

ガラクタ山の女の子

2011年2月21日12時10分発行